もしもヴァーリがドラグソボールのファンで、かつHIPのYOUに欲望を持ったら

ベジタブル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

勢いで書き並べた設定を少しずつ出しつつ、黒歴史を執筆していきます。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 10
第3話 …… 23
第4話 …… 33
第5話 …… 45

第1話

ラーメンを食べていた時、赤の波動を感じ取った。
（あのおっぱいを見るまで！
死んでも死にきれない！）
声からして若い男なのは確かだ。
その悲痛な叫びには、強い意志を感じた。
「フッ、この真紅のスープが運命を導いたか」
『いや、絶対違うからな。赤いのは別にラーメンと関係ない』
辛党というわけではないが、いい担々麺だった。
あとでリストに加えておこう。
それにしても。
情けないやつだ。全く、たかが戦闘力１０００ちょっとの奴らに殺されるなんてな
……
『今代の赤龍帝はどうやらハズレだったようだな。だがヴァーリ、その台詞は言ってみたかっただけだろう？』

相棒のアルビオンはそう言ってきたが、気を感じ取れば分かるのだ。まあ、弱々しい赤のオーラだったため、このエリートの俺でもだいたいの方向しか分からない。もし黒歌だったならば、詳しい位置を把握してくれただろうし、まだまだ俺も精進しなければならないな。

はぐれ堕天使の件からするに、隣町といったところか。

ラーメンのお代を支払い、『ごちそうさま』をして店を出る。

「よし、行こうか」

『生死は分からんが、神器をはぐれ堕天使に奪われた可能性もあるか』

そこは『赤龍帝を生き返らせるんだな？』とでも言ってほしかったが、そういう類の神器（セイクリッド・ギア）ではないし、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）を持っているわけではない。相棒の言う通り、様子見が正しいとはいえ、スルーされるのも癪だ。

ドラグソボールで俺が好きなのは空孫悟（そらまごさとる）じゃあない。ヤサイ人の王子ベジッタ様なのだ。登場時は純粋悪でありながら、妻や子どもたちに向ける愛情は主人公以上で、しかも幼少期は宿敵の下で育ったという、その生き様は。

『分かった分かった……』

息子と別れるシーンとか、まだまだ語り足りないのに、残念だ。

鳶雄もラヴィニアも、ピーコロだの空孫飯（そらまごめし）だのと、どこかにベジッタ好きの同志はい

ないものかと考えつつ、透明化の魔法をかけて翔び立つ。生身で飛ぶ姿をヒューマンが撮影して、ＳＮＳにアップされでもしたらいろいろと面倒だ。

さて、はぐれ堕天使による拙(つたな)い結界の中へ下降した。悪魔の領地の監視網ごと、圧倒的パワーで粉々にできるが、このエリートの俺は気づかないように入り込むことだってできる。それに、面倒を起こすと、アザゼルというか、シェムハザがうるさい。

「駒王町って言ったな。なかなかの戦闘力を持ったやつらがいるな」

『……あれは確かリアス・グレモリーか。なるほど、今代の所有者は下僕悪魔になったらしい』

溢れ出る龍の気を抑えることのできる俺を、今のリアス・グレモリーが見つけられるはずはない。彼女は魔法で血の処理をした後、意識を失ったままの赤龍帝を抱えて、魔法陣でどこかへワープしていった。

「フッ、今代のライバル君は、どうやら下級戦士にも満たないらしい」

『不服か？　ヴァーリ』

以前までの俺だったなら、そうだったかもしれないな。だが、今の俺には、神滅具持ちのライバルがいるし、正真正銘の宇宙最強になる夢だってある。相棒には悪いが、別に赤龍帝にこだわる必要もないさ。

『幾瀬鳶雄(いくせとびお)か。人間の身でありながら、ヴァーリの才能に食らいついてこれるからな』

それに、あいつの作る料理は美味い。ドラグソボールを見た俺は、食事量の多さは強くなるために重要なのだと気づいたのだ。食事など単なる栄養補給だと思っていたのだがな。

「さて、彼は空孫悟のように、この俺に追いついてこれるといいな」

『ルシファーの血を引き、仙術や魔法も研鑽してきたお前との差は、まさしく天と地だがな』

ちなみに、ルシファーの話をしたら、何人かに中二病設定だと言われた。解せぬ。

『さて、これからどうする？』

なに、急ぐ旅でもない。

この町のラーメン屋でも巡りながら、彼の動向を見ることにするさ。

「龍を宿す者はいずれ闘争に巻き込まれる運命にある。それまでに彼も最低限の力をつけていなければ、後悔することになるだろう」

どちらも、暴走の危険性が高い神滅具（ロンギヌス）だ。

いまだ神器の残留思念の全てを掌握はできていないし、覇の力も完全に制御できているわけではないのだ。俺自身、さらに高みを目指すために、どうにかして彼ら彼女らにドラグソボールとラーメンを布教しなければならないだろう。

「フッ、俺はまだまだ強くなれる」

『別の方法を考えてくれ……』

相棒はなんだか項垂れている気がするが、ともかくとして、はぐれ堕天使程度ならば、彼の成長に役立つかもしれない。アザゼルにはできれば連れ戻してこいと言われたが、もう少し待ってみることにしよう。

「はわう！」

「いいヒップだ」

『……は？　待てヴァーリ、ドラグソボールのクサい台詞はまだ良いとしよう。だが、お前は恥ずかしげもなくそんな言葉を口にするようなやつだっただろうか、いやない』

この日本という国では珍しく、シスターの格好だ。まあ、アキバを中心としてコスプレという文化があるのだとアザゼルから聞いたことはあるが、並みの悪魔なら思わず逃げてしまいそうな、神への祈りを感じ取れる。

「あうぅ、転んでしまいました……」

「手を貸そう」

シスター服に隠れたヒップが気になるが、ラヴィニアには『女の子に優しくしなさいです』と口すっぱく言われてるので、手を差し出すことにする。少し力を入れれば、折れてしまうような柔らかい手だが、少しザラザラした感触もした。

水仕事を頑張ってきた証拠だ。

俺も幼少期はこういう手だったな。

「はわっ、ありがとう……ございます……」

俺から遠慮がちに手を離して、少しもじもじし始めた。ヴェールから覗いている金色の髪を見ているとラヴィニアを思い出すが、翡翠の色というべき瞳だ。

さて、このシスター服がロングスカートなのが、非常に残念だ。

『どうしたヴァーリ、お前はイキでクールなナイスガイじゃなかったのか!?』

相棒が弱々しい声でそう尋ねてきたが。

そんなことを言った覚えはない。

「君も旅をしているのか?」

彼女が落とした旅行鞄を持ってみたが、その華奢(きゃしゃ)な腕ではバランスを崩しても仕方がないだろう。といっても、この比較的平和な日本で見てきた同年代の女子学生たちよりは、ほんの少し鍛えられている。

「あなたは旅行に来ているんですね……あっ、私はこの町の教会に赴任することになりまして」

なぜだか少しシュンとしたが、気を取り直してそう告げる。

それにしても、教会は天使勢力だが、悪魔が担当しているこの町に来るとは、その話は穏やかそうではない。はぐれ堕天使絡みなことは予想できるし、それに、この少女は

なかなかの魔力を持っているようだ。
　それに。
『ああ。神器（セイクリッド・ギア）を宿しているらしい。しかし、この気配は……』
「それにしても、ようやく言葉が通じる人に出会えました！　えっと、母国語、なのでしょうか？」
「いや。俺は悪魔とヒューマンのハーフだからだな」
　嬉しそうにしていた彼女は一瞬キョトンとしたが、納得したような表情を見せた。
　どんな国の言葉でも通じるという悪魔の特性は、旅の時にはいろいろと役立っている。世界各地のラーメンの食べ歩きをしながら修行をしていたら、様々な仲間ができた。いつか、鳶雄たちのような、チームを結成するのもいいかもしれないな。
「良い悪魔さんなのですね。こんな素敵な方と会えたこと、神に感謝しないと」
　手を組んで、祈っているらしい。
　純粋に、信心深いようだが。
『なかなか珍しいタイプのシスターらしいな』
　教会勢力のシスターならば、『悪魔裁くべし』みたいな教えを受けるはずだ。聖水や聖典といった弱点などすでに克服しているが、もし敵意を見せたのなら、男女関係なく反撃させてもらうつもりだった。まあ、悪魔といっても、堕天使勢力に付いているが。

祈り終えたことで、やがて目を開いた。
「あ！　私、アーシア・アルジェントと言います！　ぜひアーシアと呼んでください」
アーシア・アルジェント、良い名だ。
ラヴィニアの禁手化を思い出す。
「ヴァーリだ」
名字は黙っておけと、アザゼルに言われたこともある。それに、あまり好きなものでもない。
「はい！ヴァーリさん！」
アーシアは嬉しそうに笑顔をこぼす。
だが、ふと何かに思い立った。
「あっ、えっと、教会に向かわないといけないんでした」
「申し訳ないが分からないし、日本に来たばかりなのだから休んだほうがいいだろう」
そう言うと、少し俯きながら頷いた。
仙術で気を診たところ疲労も溜まっている。
旅行鞄を代わりに持って、駅前を目指す。アーシアをホテルに案内する途中で、俺も思い付いたことがある。
「ところで、お尻を見せてくれないか。可能な範囲で、望む対価を渡そう」

「……はい？」

『ヴァーリの……エリートの誇りはどこへ……』

相棒は涙した。

それはもう、俺が寝る時間まで神器に引きこもった。

＊＊＊＊

下着姿のヒップを見せてもらえたので、寝床を提供した。

ちなみに対価は、『責任』らしい。

第２話

昨日はなかなか充実した日だった。

赤龍帝は一応見つかるし、アーシアのおかげで、俺に足りなかったピースが埋まった気がする。ラーメン、ドラグソボール、そしてヒップ、この３つならば、歴代の白龍皇たちを屈服することができると確信してきた。

『やめてくれヴァーリ、その３つはオレに効く……』

どうしてか、昨日から相棒の元気がない。

全盛期は神すら手をこまねいたほどの強者なのに。

「あ、あの本当に戦うんですか……？」

「なに、わるいようにはしないさ」

疲れが溜まっていたのか、アーシアはお昼までぐっすりだった。

ここがグレモリーという悪魔の領地であることや、はぐれ堕天使によって赴任する教会が乗っ取られている可能性を伝えたのだが、話を信じてくれたアーシアとは行動を共にしている。

さて、先客がいるようだが、行くか。

「初めましてだな。今代の赤龍帝？」
「なんなんだよ、お前ら!?」
　再びはぐれ堕天使に襲われ、更なる乱入者にまだまだ赤龍帝は状況を飲み込めていない。つい最近まで平和な日常を送っていたようだから、無理もないか。戦いの経験も皆無だろう。
「ち、治療しますね！」
「おお！　美少女シスターありがとう！」
　アーシアは緑色の光を発する神器で、傷口をみるみるうちに癒していく。
　回復系の神器は珍しい部類に入り、回復魔法の上位互換であり、どの勢力も欲することだろう。だが、彼女の身の上話によると、悪魔すら治療できることで教会からは異端扱いされたのだったか。
『ああ。教会は随分と勿体ないことをしたものだな』
「くっ、まさか、その銀髪……貴様まさか!?」
「ご明察、もしかすると神の子を見張る者ですれ違ったこともあるかもな」
　コートの背中から漆黒の翼を出しているが、それも1対の下級堕天使にすぎない。戦闘力も高くはなく、ヒューマンより長い寿命に対して、生半可なトレーニングしかしてこなかったようだ。予想なら、誰かの神器を奪って、楽して強くなろうとしていたのだ

ろう。
「私としては。是非とも引かせてもらいたいのだが、どうだろうか？」
　と言いつつも、背中側に隠した手には光のオーラを纏っているようだ。圧倒的パワーを隠しているこの俺を甘く見ている証拠だ。白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）の『半減』を使うには触れることが条件なので、確かに先手必勝がセオリーなのだが、この俺が神器だけに頼っているはずがないだろう。
「なに、俺は手を出すつもりはない。そうだな、ここにいる彼と戦い、もし勝てたのなら見逃してやってもいいだろう」
　対価で『責任』を取る必要がある以上、極力、彼女の意向には従うつもりだ。あまり戦いを好まない性格のアーシアにはわるいが、赤龍帝の彼を見極めさせてもらいたい。
「お、俺ぇ!?」
「ああ。もしこんなところで負けるようならば、貴様はいつか大事な者を失うだろう」
　転生悪魔になったし、少しはマシになったかと思えば、悲しくなるくらいの魔力しか感じられない。気の大きさだって、非戦闘要員の一般悪魔の段階だ。そんな状態で、はぐれたちが動きやすい時間帯を１人で歩かせるとは。
　リアス・グレモリーも様子見しているということか。
　強力な神器ほど、暴走の危険性があるからな。

「イメージしろ」
　リアス・グレモリーたちも慌てて来ているだろうから、あまり悠長にしている暇はない。人払いの結界にどうにか入ろうとしている使い魔に中の光景が見られないよう、さらに強固な結界を張っておいた。
「貴様が思い描く最強の姿を強く思い浮かべろ」
「え、えーと」
　両手を腰に当てる、その構えはまさか！
「ド～ラ～ゴ～ン～破ァ！」
　まさしく、空孫悟（そらまごさとる）のドラゴン波だ！
　まさか貴様は俺の因縁のライバルということか！
『いや、まあ、うん、そうだな……』

「なんか出たァ!?」
「それが君の神器さ。だがまだ完全ではない」
『いまだ龍（トウワイス）の（クリティカル）手のままのようだな。赤いのがかわいそうになる』
　永遠のライバルの所有者の才能には、アルビオンもかなり複雑な気持ちを抱いているようだ。

「うぉ！　籠手か!?　なんだこりゃあ!?」
たしか、赤龍帝の籠手（ブースステッド・ギア）が覚醒する前は、それと酷似しているという話だったな。通常状態では、能力を2倍にするという、所有者の地力によっては強力な神器だ。仮にアーサーが持っていたなら、禁手化（バランス・ブレイク）した俺と互角以上の戦いができるだろう。
「はっ、何かと思えば、龍の手（トゥワイス・クリティカル）か」
はぐれ堕天使は余裕を取り戻したようで、不敵な笑みを浮かべた。どうやら、転生悪魔やヒューマン程度が持っていても、特に意味はない神器だと考えているものらしい。亜種の禁手化（バランス・ブレイク）がある以上、神器は使い方次第だと俺は思っているのだが。
それに、純粋に鍛えて最強を目指しているバラキエルという堕天使を目標に、トレーニングに励めばいいだろう。
「知っているか？　落ちこぼれだって、必死で努力すればエリートを超えることがある」
「おもしろい冗談だ。流石はエリート様だな」
俺の発言に皮肉を言いつつ、はぐれ堕天使は光の槍を展開した。
「神器さえ手に入れれば、我々は最強になれるのだ！　人間や下僕悪魔が持っていても宝の持ち腐れだろうに！」
「堕天使陣営としては、所有者の保護が優先で、仮に危険性があるなら処分の筈だがな。貴様らの独断か」

アザゼルも、後者に関しては余程のことがないと命令はしない。ヒューマンにとって神秘である神器を、犯罪に使う奴とかが特に対象となる。

やはり、アーシアも堕天使に神器を奪われて死ぬところだったらしい。悪魔の領地でそれを画策してしまったことや、そして俺というエリートがアーシアの保護についていることからも、その目的は叶うことはないだろう。

「よく吠える堕天使だな。ところで、君の名は？」

「兵藤一誠、だけど……」

いまだ足をガクガクと震わせる少年は、このままでは弱点の光で再び瀕死になるだろう。おそらく、別のはぐれ堕天使とはいえ、それが死因になったこともあるから、トラウマになっている。

「イッセー、何か譲れないものがあったはずだ。

信念や想い、その力をここで爆発させてみろ！」

「お、俺は……」

イッセーは一度目を閉じて、だらんと頬を緩ませる。

その欲望こそが、赤の波動を発した力の源だ。

「生おっぱいを見るまで、死ねないんだァ！」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ!!　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!』

「ウェルシュ・ドラゴン!?　まさか貴様も神滅具(ロンギヌス)を!?」
　籠手の形が変わり、その真の姿を見せた。
『起きたか。赤いの』
『ああ。待たせたな、白いの』
「あ、あんたら誰なんだ!?」
「君に眠っている龍が目覚めたのさ」
　俺も白龍皇(ディバイン・ディバイディング)の光翼を出すと、その宝玉が光りながら、龍たちの声がアーシアたちにも聞こえるようになる。アーシアも知識としては二天龍のことを知っていたようだが、伝説上の存在ともされる生物に会えて驚いているようだ。
「おっぱいに対する想いが神器を覚醒させた。まあ、俺としては、おっぱいよりヒップのほうが素晴らしいと思うがね」
「えっ、なんでこのイケメン、真顔で言ってるんだ」
『お互い、今代の宿主に苦労しそうだ……』
『分かってくれるか……』
　相棒たちは項垂れた声を出し、アーシアは自分の身体を守るように縮こまって、腕で胸とお尻を隠した。
「１０秒ごとに自身の力を倍加していく。つまり、一撃必殺がセオリーだな」

「そんな無茶な」
その翼で上空へ距離を取ったはぐれ堕天使に、今の飛べないイッセーでは歯が立たないだろう。倍加能力はいろいろと応用が効きそうだが、今の彼はそういったものを思いつく余裕はないだろう。
「フッ、エリートの俺が力を貸してやろう」
はぐれ堕天使には申し訳ないが、さっきの慈悲という優しさは撤回させてもらおう。
「ルシファーの血を引き、天体魔法を使いこなす、この歴代最強の白龍皇がな」
「ああ。そういう設定なんだな。だがイケメンだし、彼女もいるし、ぐぬぬ……」
誰がルシドラだ。解せぬ。
確かに天体魔法は黒歴史で編み出したものだが。
ラヴィニアから魔法を習いながら、寝る間も惜しんで俺が考えたオリジナルの魔法は最強に決まっている。
「天体魔法、六連星（プレアデス）！」
「うおっ！　かっけぇ！」
操作できる6つの魔力弾を放つと、上空で回避しようとはぐれ堕天使は逃げ惑う。どうやらそれなりの時を生きた堕天使らしく、飛行戦闘が得意なようだが、結界内ではそれも制限されてしまう。

「このっ！　隙だらけだ！」
術者を止めるべく、こちらへその光の槍を投擲してきた。
そんなもの、気を纏った手で粉々に砕く。
「キャッ！」
「大丈夫だ、アーシア。この俺が、操作しているからといって、無防備な筈がないだろう」
さて。
『Ｂｏｏｓｔ！』
赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）から、そんな音声が鳴り響いた。
「準備はできたか？」
『ああ、助かった。白いのの協力は癪だが、今の相棒では隙だらけだからな』
「お、おう。サンキュな！」
確かに、実戦では待ってくれるはずもない。もし赤龍帝の籠手を相手にするのなら、先手必勝か、ヒットアンドアウェイか、そういう戦い方がセオリーだろう。といっても、全盛期の相棒たちは、能力発動に１０秒の間隔なんてなかったと聞く。
「天体魔法で直接落としに行く。
流星（ミーティア）、またの名を舞空術！」
「やっぱり、こいつ中二病だ……」

魔力を纏った高速移動で上空の堕天使に追いつき、地面に向かって背中を蹴り落とす。

『ヴァーリ、さすがに甘すぎるんじゃないか?』

相棒はそう咎めてくるが、相手が油断していない状態で、彼が堕天使に勝てるビジョンが思いつかなかったのだ。今回は、元一般人が、敵を認識して攻撃するということを学んでもらっただけでも第一歩だろう。

「よ、よしっ……」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ!!』

溜まった倍化が発揮され、恐らく元の８倍くらいの戦闘力にはなったはずだ。なんだか界王拳みたいだし、今度そういう気を使ったトレーニングでもやってみようかと思いつつ、俺はアーシアの側へ降り立った。

「舐めるな、小僧共!」

その手から光を放ち、イッセーやアーシアは思わず目を閉じる。特に、転生悪魔であるイッセーにとっては、目晦まし程度の光でさえ、強烈な痛みを感じることだろう。

「死ねぇい!」

その手に生み出した光の槍で、貫かれてしまうだろう。

「俺は、おっぱいのために死ねないんだァー！」
「ば、馬鹿なァ!!」
無我夢中に前に突き出し、両手から放った気弾が直撃した。
「ほっ……イッセーさん、良かったです」
「フッ、おもしろいやつだ」
魔力ではなく、無我夢中で気弾を使ったらしい。
ここからは予想になるが、俺がラヴィニアの美尻を見て気を感じ取れるようになったように、イッセーもおっぱいを見て気を感じ取れるようになっていたのだろう。世の中には、女性のスリーサイズを気で測定できる、スカウターという能力を持つ者がいると聞いたことがある。
もしイッセーが生おっぱいに触れたのなら、もし俺が生ヒップに触れたのなら、それぞれどれほど劇的な進化をもたらすか、実に楽しみだ。俺もまだまだ精進しなければ……
『やめてくれ』
慣れない状態で赤龍帝の籠手を使った影響でバッタリ倒れているイッセーは、まあ、結界をこじ開けようとしているリアス・グレモリーに任せるとしよう。いろいろ知って

しまったはぐれ堕天使は始末しておきたいが、アーシアが望まないか。
神の子を見張る者の、アザゼルの部屋にはぐれ堕天使を魔法陣で送っておく。
「さて。アーシア、悪魔陣営に入るか、俺と来るか、どっちがいい？」
「えっと……？」
初めて、戦闘を見た彼女は震えている状態であり、何にせよ勢力として保護したほうがいいだろう。堕天使陣営も神器持ちが多いとはいえ、いまだ残存している反アザゼル派に狙われる可能性がある。そろそろ動きそうだしな。
「悪魔も一筋縄ではいかないが、これから来るグレモリーは身内に対して慈愛が深いと聞く。君ならば、能力や才能、他にも人格や見た目やヒップも認めて貰えるだろう。正当にな」
「もう、ヴァーリさん、照れちゃいますよ……」
『いいのか。それでいいのか？』
俺が目指すのは覇道であることは確かだ。アーサーたちは付いてきてくれそうだが、アーシアもいずれ戦いに巻き込むことになってしまう。やれやれ『責任』を取るというのはなかなか難しいものだ。こういうことは鳶雄たちに任せたいものだ。
「その、私が困っているとき、ヴァーリさんは助けてくれますか？」
「苦手分野だが。白龍皇の名に誓って、責任を取ろう」

我ながら、知り合いから助けを求められるようなことはないから新鮮だ。鳶雄たちに協力していたときも戦闘経験が積めるという考えが多くを占めていた。まあ、あいつらがもしいなくなったら寂しいと思ったことは少しくらいあったけれど。

「私と、つ、つき……お友達になってくれませんか！」

「ああ。友達だな。了解した」

つまり、ラーメンやドラグソボールを布教してもいい関係ということか。いつか作りたいチームにとってもアーシアがいることは心強いし、今の予定メンバーは後方支援を守りながらだと弱くなるほど柔（やわ）ではない。

それに、アーシアにはまた美尻を見せてもらえるかもしれない。

『いつからヴァーリはこうなったんだ……』

「さて、この町には知り合いがいる筈だから、明日になったらそいつと合流しよう」

「はい！」

恥ずかしがっているアーシアの手を取って、この場を離れた。

たぶんいるはずだ。

妹のストーカーをしている黒歌が。

第3話

駒王町でも多くのヒューマンが生活しているが、裏の世界としては悪魔が管轄の土地となっている。ある程度の霊地であって龍脈が巡っているしな。ヒューマンにとっても、何かと生きづらい社会人は悪魔との契約はｗｉｎ―ｗｉｎだろう。

「ここが……？」

「郷に入っては郷に従え、ということさ」

黒歌が拠点にしている住所を聞いておかなければ、居場所は分からなかっただろう。本人は気を隠すことには長けているし、見た目はただの民家なのだからな。

「珍しい来客ですね。どうぞお入りください」

「はわわ、大きいです……」

縦縞のセーターを着た黒髪ロングの眼鏡女性が玄関を開けて顔を見せた。悪魔陣営からはＳＳランクのはぐれ悪魔として追われている身なので、町で暮らすにはそういうキャラ作りが必要だったのだろう。

黒歌は、家まで手招きする。

リビングでさっさと普段着に着替え始めるようだ。

「それで？　あんたが女連れなんて、何事ニャ？」
「み、見ちゃダメですぅ！」
　アーシアに視界を塞がれてしまったが、別に会話に支障があるわけではない。黒歌はプライベートの時は、ラヴィニアかよって思ったくらいには、男の前で恥ずかしがらない。
「元々は赤龍帝に会うつもりで来たのだったな」
「ああ。赤龍帝ちんね」
　どうやら、すでにイッセーが覚醒したことには気づいているようだ。そして、昨晩の戦闘もどこかで見ていたのかもしれない。以前よりもますます、相手の意表をつくような戦闘が得意になっているだろう。
『ヴァーリ以上の仙術に加え、妖術や魔法も使いこなすからな』
　そうだな、また手合わせしたいものだ。
「やっ、あんたに敵うわけないニャ。バトルジャンキーなとこは相変わらずねぇ。着替え終わったわよ」
「は、ハレンチです……」
　アーシアがしぶしぶ顔の手を取ってくれると、いつも通り着物を着崩した黒歌が、ソファの背もたれの上に座って足を組んでいた。もしイッセーが見たなら大喜びしそう

なくらいおっぱいを見せている。
　それにしても、なかなか良いヒップをしているし、黒歌ならお触りも頼めるのでは。
『自重しろヴァーリ』
「で、この娘は？」
「うひゃぁ！」
　一瞬で背後に回り、おっぱいを背後からお触りされ、アーシアは驚いた。俺でなければ気づかなかったくらいだ。ていうか、その美尻にも俺より先に触るとか、なんとも羨ましいものだ。
『ヴァーリの教育にわるい光景だ……』
「アーシア・アルジェント、友達さ」
「あー、うん、いつもこういうやつだから」
「私にも原因があるので、お気になさらず……」
　アーシアを軽々と抱えて、そのままソファに座り込んで膝に乗せる。やはり妹に飢えているようで、ルフェイにもこんな風に近寄ろうとして、よくアーサーとバトルしていたことを思い出す。
「うんうん。なかなかの魔力ニャ」
「んっ……」

「ああ。鍛えれば伸びるだろう。回復系の神器持ちでもあることだしな」
首を舐めているが、そういうほうが相手の気を感じ取りやすいのだろうか。猫？（ねこしょう）特有のものなのかもしれないが、今度俺も試してみようか。いや、あの美尻をペロペロとか、絶対俺を進化させてくれるはずだ！
『やめてくれヴァーリ』
「美猴は？」
「また登山にハマってるニャ」
『ゆるキャン△』が２期を放送するのだと興奮していたな。黒歌が『ごちうさ』３期を喜んで見ているタイミングだったから、美猴と黒歌が大喧嘩したのだったな。ドラグソボールを見て仲良くしようと言ったら、２人が仲直りした。
『一体、何周したと思っている。映画を見た後、覇龍を会得するような宿主は未来永劫お前だけだろう』
いや、ドラグソボールＧＴで完結かと思えば、分岐ルートで続編が放送され始めたのだぞ。これは、俺にとって劇的な経験だったと言ってもいいだろう。本編ではスーパーヤサイ人３にもならなかったあのベジッタがだな。
『落ち着けヴァーリ。気が漏れそうだ』
「うう、しろねぇ……」

「あの、なにか悲しいことが？」
　いつのまにか、黒歌も気が漏れそうになっている。美猴がいなければさっさと居場所がバレていただろう。先日ごちうさ難民になった時は、アザゼルの財布を使って散財したようだし。
「白音はね。私の可愛い妹でね。長らく会えていないのニャ……」
「それはつらいことですね……」
　ＳＳ級はぐれ悪魔になった当時は『白音は置いてきた。ハッキリいってこの闘いにはついていけない』だったために、治安の良いグレモリー領に置いていったらしい。リアス・グレモリーの眷属になれたのは、立場が危うかった白音にとっては最善の選択だっただろう。
「黒歌もはぐれ悪魔として追われる身ではあるが、それは主がわるかったらしいな」
「そう。あの年で仙術を使わせようとしたからニャ……」
　黒歌自身も、奴隷のような扱いだったらしい。本人はそれほど気にしていないが、転生悪魔になったのも無理やりだったのだろう。やれやれ、どの陣営も叩けば埃が出るようだ。
「早いが、昼食の準備をしてくるか」
「いつも通りつけ麺ね。私、猫舌だし」

「ヴァーリさん、お料理できるんですね！」
ラーメンと餃子くらいだがな。
魔法陣から強力粉を取り出し、まずは生地を鍛え上げる。
「あれ、アーシアって、お箸使えるの？」
「いえ、使えませんね」
「フッ、俺が教えてやるから安心しておけ」
黒歌以外に箸の使い方を教えてきた経験が再び活きてくる。

＊＊＊＊

悪魔ではないアーシアにはきつい時間帯だが、夜の廃墟にやってきた。黒歌のおかげで最上級悪魔クラスではないとこちらの存在には気づかないだろう。普段は美猴が付添人なのだが、俺たちが代わりに付いてきた。
「イッセー、今日は悪魔の戦い方を見せてあげるわ」
「はい！　お願いします！」
リアス・グレモリーと、その眷属たちが来たようで、その中には赤龍帝であるイッセーも含まれている。どうやら、無事に眷属として組み込まれたらしい。これで、別の誰かに神器を奪われたり、危険因子として処分されたりは無さそうだ。

あの白髪の少女が、黒歌の妹で、確か今は小猫と名乗っていたか。
「旨そうな匂いがするぞ？　不味そうな匂いもするぞ？
甘いのかしら？　苦いのかしら？」
まさしく怪物と言える、はぐれ悪魔が姿を現した。
戦闘力からして、白音に傷1つ付けれないだろう。
相手が強すぎて、黒歌が飛び出しでもしたら困る。
「あれも、はぐれ悪魔さんなのですか？」
「そうよ。なかなか喰ってるわねぇ」
「ああ。もう手遅れだな」
上半身はおっぱい丸出しの人間らしい裸体なのだが、下半身はケンタウロスのように4足歩行の化け物となっていた。なあ相棒、あの場合、ヒップとはどこの部位を言えばいいのだろうか。
『知らん。聞くな』
「手っ取り早く強くなれる方法ではあるが。人を魔力ごと喰らい、異形になって冷静さを失うのは下級戦士のやることだ」
「ああ、主よ……」
アーシアは手を合わせて、犠牲になった者たちへ冥福を祈り始めた。

「んー？　教会の神って」
「気にすることでもないだろう」
　信仰というのはそういうもの。
　アーシアにとって自然な行為なのだろう。
　さて。
「きゃー、白音がアッパーしたのニャ!!」
「はい！　すごいパワーですね！」
　速度が自慢の騎士（ナイト）、防御と攻撃が強力な戦車（ポーン）、全体的に強力な女王（クイーン）がそれぞれバイザーを攻撃している。黒歌がキャッキャッと喜んでいるが、並みの転生悪魔の中では強い部類といった程度か。仙術はまだ会得していないようだ。
「わわっ、すごい雷です！」
「アーシアも魔法の訓練をしてみるか？」
　魔法はいいぞ。
　思い描いたイメージを形にできる。
「私にもできるでしょうか」
「自分に自信を持つことが重要だな」
「あんたは持ちすぎニャ」

ていうか、あの女王が『姫島』か。転生悪魔としては強力な雷を放っているが、どうやら光力は抑えている。バラキエルとの事情はある程度聞いているが、その確執は深そうだ。

なかなかの才能だが。

まあ、鳶雄のようにはいかないか。

「消し飛びなさい」

リアス・グレモリーが消滅の魔力でとどめを刺して、戦闘は終了した。噂通りバアルが持つ『滅びの力』を遺伝しているらしい。今でも出力を抑えているようだが、まあ、模擬戦等では使い勝手の良いものではない。生死を分けるような実戦でこそ磨かれるものだろう。

そういう意味では、不死身のフェニックスなど、いい模擬戦相手なのではないか。

「では、帰りましょうか。

イッセーには明日の早朝から訓練をつけないとね」

「はい！　俺もがんばります！」

今日は見稽古で終わったが、イッセーは自分の意志で鍛えることを選んでいるようだ。それが分かったことが今日1番の収穫だったな。何事も基礎トレーニングを続けることが重要だ。

はぐれ悪魔がいた場所に、白音は一度振り返った。

「白音が帰っちゃう……」

「また会えますから」

アーシアに慰められている黒歌が暴走しないうちに、俺たちも帰ることにしよう。どうせ明日は黒歌が学校に忍び込むのだし、昼間はアーシアのトレーニングにでも付き合うとするか。

第４話

　堕天使に狙われている状態であり、アーシアは遠慮していたが、町の散策に出かけた。仮にも敵地で、白昼堂々堕天使がうろつくこともないだろう。それに、白龍皇の名にかけて、アーシアは守ってみせるさ。

　黒歌の外用の私服を借りたため、いわゆる萌え袖となっている。ロングスカートということで、あまり肌を見せないシスターらしい服装だ。そんなアーシアにも、いつか駒王学園の制服でも着てもらって、ヒップが見えるか見えないかという姿を見せてほしいものだ。いやはや、日本の女子高生というのは奥が深い格好をしている。

『赤いのと、酒とやらに?まれたい……』

　日課のトレーニング以外、最近相棒の元気がない。

　なるほど、宿命のライバルと会いたかったのか。

「ヴァーリさん!?」

　楽しそうに町をキョロキョロしていたアーシアの手を取って、感じ取った赤の気配に向かって歩く。

「１週間ぶりだな」

「なっ！　あんたは!?」
白昼堂々、接触してくるとは思っていなかったらしい。
構えを取ろうとしているところを手で制する。
咄嗟に同行人を庇うように前に出て、戦闘態勢に入ろうとするのは、裏の世界に少しずつ馴染んできた証拠だ。身内を守ろうとするのは彼本来の気質だと思うが、好感が持てるじゃないか。
「君も、相棒からはいろいろ聞いているようだな」
「ああ。まあ……」
同行人を気にしているらしく、言いづらそうにしている。休日ということもあって、ヒューマンの女子と行動を共にしていたようだ。三つ編みで眼鏡をかけた女子は、俺の下半身をじっと見つめた。
「ふふっ、あなたも童貞なのね」
「なにっ！　まさかスカウター持ちか！」
「ヴァーリさんって童貞だったんですね！」
「まじか。イケメンでも童貞だったのか」
一瞬だったが、気を探られた感覚だ。しかも男のアレを見られて微笑ましく思う視線は、ラヴィニアと一緒にお風呂に入らされた時に味わったものだ。くっ、この俺がかわ

いいなどと。
「ねぇ。兵藤、この外人さんたちとはお知り合い？」
「知り合い、なのか？」
「運命（さだめ）のライバルだな」
　それはもう、ジョジョとＤＩＯに匹敵するくらいの。
「あー、この人からも兵藤って狙われてるの？」
「いや、もう少し成長してからがいいな」
「ちっげーよ！　俺は木場にもこいつにも狙われてねぇ！　それとお前も紛らわしいことを言うなぁ！　美少女シスターが絶望しているじゃねぇか！……ぜぇぜぇ」
　アーシアがわなわなと震えているが、どうやら俺は何か失言をしたらしい。イッセーは分かっているようだが、流石は俺のライバルだ。
「なんだ。絶滅危惧種ってわけね」
「確かに。ルシファーの血を引く者はそうはいないな」
「あー、そういう意味じゃなくてだな」
　微笑ましく優しい顔を向けてきた眼鏡女子は、アーシアに何か用があるようで、２人で少し離れていった。特に、悪意というものは感じられないし、大丈夫だろう。
「んで。あんたって、なんなんだ。部長に聞いてもどこに所属しているか分からないっ

て言われたぞ？」

部長というのはリアス・グレモリーか。

神の子を見張る者の中でも俺の存在は噂程度に留まっているからな。

「俺の名はヴァーリ・ルシファー、魔王ルシファーの血を引き、天体魔法を使いこなす、白龍皇の名を受け継ぎし者だ。神の子を見張る者に所属していることにはなっている」

「えーと。中二病はともかく、悪魔で堕天使の仲間なのか……？　じゃあなんであの時、堕天使を……？」

うんうんと頭を悩ませながら、情報を噛み砕いている。

「あいつらははぐれ堕天使でね。おそらく、神器持ちの調査という名目でこの町に来ているのだろうな。本人たちは神器を奪う目的だが」

「神器を……って取られると死ぬのか……」

彼の相棒が補足を入れてくれたようで、表情が青ざめた。といっても、奪ったところで相性がわるければ、それこそ宝の持ち腐れだ。仮に神器が適応しなければ、奪った者自身が死に至るケースすらある。そういえば、アザゼルは趣味で人工神器をいくつか作っているが、その候補者は決まったのだろうか。

「いまだ目覚めていないが、あの女子も神器持ちらしい」

「えっ、桐生が？」

龍脈があるこの駒王町が合っているのか、一般家庭の生まれでありながら、身体の魔力の流れがスムーズに行き渡っている。もし師がいれば、ラヴィニアやルフェイのような、いい魔法使いになっていただろう。

「裏の世界のことについては？」

「いや、あいつは普通の幼馴染だよ。今日だって、俺の気分転換に連れ出してくれたみたいで」

転生したとはいえ、1度殺されたばかりだ。はぐれ悪魔討伐の時は気丈に振舞っていたとはいえ、先日の堕天使の光力に怯える姿からすれば、彼の傷は完全には癒えていないのだろう。それさえ乗り越えれば、彼は一皮剥けるのではないか。

「自分の中の弱さや足りないものを埋めてくれるのが、仲間という存在、らしいぞ」

「ヴァーリ、お前って結構いいやつなんだな」

ドラグソボールのベジッタだって、登場当時は冷酷だったが、ヤサイ人を滅ぼした仇敵がいなくなった後は、地球の生活で絆されていった。ただひたすら強くなることを選んできた彼も、穏やかな心を得た。

「自覚はないがな」

俺は、アザゼルや鳶雄たちと出会わなければ、いまだ孤高で復讐者（リベンジャー）だったかもしれない。もちろん、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーとの決着は付けなければいけないと

は思っている。
「部長からは白龍皇には気をつけろって言われたけど、ヴァーリとなら仲良くできそうな気がする」
「フッ、君とは悪魔人生で長い付き合いになりそうだな」
イッセーは強くなれる。このエリートの俺に追いつくには何十年かかるか分からないが、面白い進化を見せてくれるだろう。どんどん強くなっていく鳶雄たちを見ているような気分だ。
「ならば。彼女を守れるくらいには、強くなりたまえ」
「おう！　お前にもいつか勝ってみせるからな！」
アーシアも、同年代の女子と楽しく話していて、ヒューマンとして普通に暮らせていて、あと１００年を生きるかどうかだろう。たった１００年だが、責任を取るまでは守ってみせるさ。

＊＊＊＊

悪魔で赤龍帝になって、そろそろ１週間だ。
リアス部長に、朱乃さんと小猫ちゃん、ついでに木場という悪魔の仲間ができた。さらに、ヴァーリという今代の白龍皇にも何度か会ったりしたんだが、ていうか、あいつっ

てこの町に住んでいるのか？

そうそう。

ヴァーリから聞いたはぐれ堕天使の目的を夜に伝えると、部長は眷属全員に注意喚起した。特に俺や木場は神器所有者だしな。部長と木場は校舎の守りを固めると言っていて、俺には小猫ちゃんが同行してくれることになった。

仕事とはいえ、デートみたいで嬉しいぜ。

本人はそんな気はないだろうから。トホホ

それにしてもまさか、桐生から依頼が来るなんてな。幼馴染とはいえ、悪魔の仕事に関しては契約の一つも取れていないから、ハーレム王を目指すために今日こそは成功してみせる！

でも、あいつ、俺が悪魔って知ったらどんな反応するだろう。まあ、なんだかんだ、すんなりと受け入れてくれそうなのだが。

「こんにちは～！　悪魔ですけど～」

魔力の問題で転移できないので、小猫ちゃんと自転車２人乗りで家までやってきた。大体の場合はチラシの場所、つまり依頼者の自室に転移するものらしいが、チャイムを押して会うという悪魔稼業だ。

そういや、あいつの家って初めて来るな。

幼馴染の男の子といっしょに、俺の家に来てたし。
「イッセー先輩、血の臭いです」
「は、はぁ!?」
嗅覚の優れている小猫ちゃんがそう言うなら、本当なのだろう。
「イッセー先輩！　まずは部長に」
「んな暇あるか！」
小猫ちゃんの静止を振り切って、鍵の開いていたドアを急いで開ける。
「っぷ……」
夜目が効く悪魔の目には鮮明に見えてしまった。
全身をズタズタに切り裂かれ、十字架のように打ち付けられている。おびただしいほどの血液が床を濡らしており、もう１人の死体は天井を見上げていた。たぶん、桐生の両親だ……
「くそっ！」
俺が転移できていれば、もう少し早く来たなら、こんな結末は変わったのではないか？
苛立ちで壁を叩くと、自然と赤龍帝の籠手が発現していた。思ったより大きな音が出てしまい、それに気づいたのか、こちらへ近づいてくる足音と鼻歌が聞こえた。

小猫ちゃんではなく、敵だ。
「んん～？　これはこれは、あ～くま君ではあ～りませんか～」
返り血のついた神父服に身を包んだ男が、嗤う。
「お前がっ！　この人達をっ！」
「ｙｅｓ！　俺の名はフリード・セルゼン、とある悪魔祓いの組織に所属する末端でございます！」
その悪魔祓いがどうして、一般人を殺害するんだ。
『Ｂｏｏｓｔ!!』
「おおっ！　神器持ちとは、怖い怖い。なんか抵抗されたから、殺しちゃったんですよね～？」
桐生に、裏の世界のことが伝わることを躊躇した。
全部全部、俺のせいじゃないか。
『罪の意識に呑まれるな。今お前がすべきことはなんだ。まだあの小娘は生きている可能性が高い』
どこか焦りながら、そう伝えてくれた。
サンキュ、相棒。
「おい、この家にもう１人いたはずだ！　そいつはどこだ！」

「受け渡ししてきたぜっ！　さすが俺って仕事ができる男だろっ！」
「イッセー先輩、動かないで」
小猫ちゃんの声がすると、目の前の男の姿が消えた。
いや、攻撃したのか。
「いってー！　腕折れちゃったじゃないか！」
咄嗟に、左腕でガードしたのか、致命傷は免れているようだ。
「小猫ちゃん、外に堕天使は!?」
「いました。が、白龍皇と戦闘しています」
ヴァーリも来てくれているのか。
味方になるとこんなに心強いなんてな。
『Ｂｏｏｓｔ!!』
「なになに？　せっかく俺が頑張ったのにあいつら失敗しちゃってるわけぇ？」
「だから、私たちでこいつを」
「ああ！……なにそれ銃か！」
慌てて先ほどから貯めていた倍化を解放しようとしたら、急に足が焼ける感覚がした。ちくしょう、また光力かよ。どいつもこいつも、悪魔の弱点を突いてきやがる。痛みと涙でぼやけそうになるが、必死に相手を睨む。

『だったら力を解放してみるのだな』
相棒がそう助言してくれたので、従うことにする。
「イッセー先輩！」
「大丈夫、だっ！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ!!』
立ち上がったことで、血は噴き出すが、光力による痛みは治まった。なるほど、俺がまだ未熟な悪魔だからこんなに痛いのだ。例えば、外で戦っているヴァーリには、この程度の光力なんて効きもしないのだろう。
「ガッツあるじゃないの！　これならどうっ！」
「もう効くか！」
それに、赤龍帝の籠手でガードすれば、その光力の剣では斬ることはできない。
「小猫ちゃん、今だ！」
「えいっ！」
隙だらけの身体に、悪魔の戦車の一撃だ。
並みの人間には耐えられないだろう。
「やったか？」
「……逃げられたようです」

小猫ちゃんのパワーで、身体ごと壁をぶち破ったとはいえ、まさかあそこから立ち上がって逃げたのか。どんだけタフなんだよ。いや、今はそれより桐生の無事を確認することが先か。

『相棒、急いだほうがいい。先ほどから嫌なオーラを感じる』

「いや。確かに感じるけどさ。ヴァーリなんじゃないのか？」

急いで家から出て、見た光景は。

「な、なんで……」

ヴァーリが、膝をついている姿だった。

あんなに強いヴァーリが、どうしてなんだ。

第５話

イッセーにああ言った手前、残りのはぐれ堕天使を掃討しておこうかと思い、どこかへ飛んでいく堕天使を追いかけた。

町外れの教会を根城にしていたようだが、急に動きを見せたのだ。

「結局、後手に回ってしまったな。まさか教会勢力のはぐれまでいたとは」

住宅街で何かを探しながら、悪意を持ってうろうろしている神父たちを魔力で消し飛ばしていく。慌てて光力の剣や小銃を取り出したが、空中でも戦える悪魔を相手にするには少々不十分な武装だと思うのだが。

アーサーのように、飛ぶ斬撃というものを身につけてから、悪魔に剣で立ち向かってほしい。

『この時代に、そうそう英雄クラスは生まれないさ』

もし仮に強さランキングをつけるとしたら、１０００位までは相変わらずなのだが、それに満たない者たちが全体的に弱くなっている。まあ、それが今の世の中が比較的平和だという証拠だろう。主神はともかく、神たちがいる限り、飽きさせてはくれないだろうがな。

慢心はしないが、このはぐれ堕天使たちはやはり大した戦闘力でもない。その光力も、アザゼルの何千分の一かどうか。
「やっと追いついたぞ」
「げっ、もう来たっすか！」
「悪魔か！　ここはどうにか抑えておく。そのうちに神器を！」
ゴスロリの堕天使、それに赤コートの堕天使、あともう１人は教会にいるらしい。２人がかりでも負けるつもりはないが、この俺相手に時間稼ぎとは、一体何秒持つことだろうか。
「ほう、勝ち目があるとでも？」
「ええ、そうね」
だが相手の余裕はいまだ崩れない。
何か隠し玉でもあるのだろうか。
「だからこれを使うわ」
おっぱいに挟んでいたらしいお札から黒い蛇が飛び出し、自分自身の全身に絡みつく。なんだこのパワーは、一体どれほど上昇していくか分からない。
これはまさしく無限！
『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オーフィスだとぉ!?』

生前の相棒すらも超えるドラゴンのことか。俺も知識としては知っているが、確かほとんど次元の狭間から出てこなかったはずだ。

「なにこれ！　すごい！　力が溢れる！」

『いかんな。不完全な術式によって、完全に暴走している。このままでは周囲を巻き込んで自爆するぞ！』

結界を貼っているが、ラヴィニアやルフェイほど強固とは言えない。ここは住宅街で、一体どれほどのヒューマンを巻き込んだ爆発になるかどうか分からない。

やれやれ、俺も随分と甘くなったものだ。

『ああ。夢幻に立ち向かう以上、いずれは無限も超えねばならんな！』

「いくぞ、アルビオン」

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!!』

これが禁手化した状態、白龍皇の鎧（スケイルメイル）だ。蒼く神々しく輝く白龍皇の光翼はそのままに、龍を模した白銀の鎧を身に纏う。そのサイズはともかく、まるでコードギアスに出るような。

『それ以上はメタいぞ、ヴァーリ』

ともかく、カッコいい姿だ。

『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！Ｄｉｖｉｄｅ！Ｄｉｖｉｄｅ！Ｄｉｖｉｄｅ！Ｄｉ

ｖｉｄｅ！』

堕天使の腹に拳を打ち込み、そのパワーを半減していく。

幼少期には神器を使いこなせていたからか、半減だけを行使するトレーニングをしていなかったのが大失態だ。ある程度の吸収を行ってしまっている。余剰な力を翼から排出しているが、それ以上のパワーが入り込んでくる。

相棒にも負担をかけてしまっているだろう。

『ヴァーリ、もう少しだ！』

部分的とはいえ、さすがに神格の力だ。

抑え込むのには時間がかかる。

先に、絡みついた蛇が耐えきれなくなり、砕けて塵になっていった。堕天使は飛ぶ力すら失って地面に落ちていく。

根比べだったが、なんとか勝ったか。

「ぐぅ……」

『くっ、あの能力のほうだったなら…』

禁手化は解けて、白龍皇の光翼だけが残ったが、その光は弱々しい。あとめっちゃ気持ち悪い。あれだ、ラーメンとチャーハンと餃子に加え、チャーシュー丼を食べた時くらいの満腹感だ。

仙術で、あり余った気を龍脈に放出していく。
無限の龍神の気、まさかここまで身体を蝕むとは。
「カラワーナ、無事っすか！」
「あ、ああ。なんとかな」
ゴスロリ堕天使が誰かを抱えてきたが、昼間に会った眼鏡女子か。アーシアに代わる神器として、選ばれてしまったようだ。彼女の家族はもう恐らく。
「そのヒューマンは置いていけ」
後手に回ってしまった責任だ。
死ぬ気で取り返すとしよう。
「うっ！グレモリーたちまで来たし。逃げるっすよ！」
「行くなら私は置いていって。動けそうにない」
ああもうと悪態をつきながら眼鏡女子を地面に寝かせて、堕天使のほうを抱え直す。神器より、仲間のほうを優先したらしい。
急いで走ってくるのは、イッセーと白音か。
「おい！　ヴァーリ、桐生、大丈夫か！
なんか相棒は無限だとかなんとか・・・」
「気を失っているだけさ。俺は吐きそうなだけ……」

『オーフィスの力の一端に触れて、よく無事だったな。白いの』
『白龍皇にとって。このくらい、どうということはない』
イッセーは心底安心したようで、地面にへたり込んだ。フッ、この俺がこの程度で、あっ、やっぱきつい。
「大丈夫！　２人共！」
「ええ。私たちは……」
「部長、こいつは俺や桐生の恩人なんです！」
いまだ俺に警戒しつつ、リアス・グレモリーたちは降り立った。
一触即発な雰囲気に、イッセーは俺を擁護してくれたようだ。この状態でも俺は負けるつもりもないが、戦う必要性もないだろう。
「とりあえず、付いてきてもらいましょうか」
「ああ。だがまずトイレに行かせてほしい」
同情するような、優しい目に変わった。
腹痛の痛みは誰もが分かってくれるようだ。
＊＊＊＊
黒猫を抱えたアーシアが校門の前で待ってくれていた。
リアス・グレモリーたちに案内された先は、彼女たちの部室らしいが、豪華な調度品

が並んでおり、悪魔の貴族なのだということを感じさせてくる。
ソファの1つに、桐生という眼鏡女子が寝かせられている。
「まずは自己紹介といきましょうか。リアス・グレモリーよ。グレモリー公爵の次期当主で、この土地の管理を任せられているわ」
何度か見かけたが、なかなかいいヒップだ。
それに、おっぱいもイッセー好みだろう。
「聞いていると思うが、ヴァーリ・ルシファーだ。ヒューマンの母と、前魔王の血を引く父との間に生まれたハーフで、今代の白龍皇でもある」
姫島の女王が出してくれた、たぶん、高価なのだろう紅茶で喉を潤す。
「はぁ。お兄様に調査を頼んでいなければ、信じられないくらいの生い立ちね」
「えっ、お前ってマジでそうだったの!?」
彼女の兄と言えば、現ルシファーか。
超越者に名を連ねる彼とも、手合わせしたいものだ。
「といっても、白龍皇に誇りはあれど、ルシファーであることにこだわりはないさ。あの頃は周りが敵ばかりだったのでね」
「ヴァーリさん……」
アーシアをはじめ、気にしてくれているようだが、もう過ぎた過去のことだ。母もど

こかで幸せに暮らしているとは風の噂で聞いた。その母の安寧のためにも、リゼヴィムは滅ぼすつもりだ。

　しかし、姫島は、バラキエルといまだやり直せると思う。迷いがあるというのは、完全に割りきってはいない証拠だ。

「運よくアザゼルに拾われてね。今は神の子を見張る（グリゴリ）者に所属している」

「堕天使総督、ですわね」

「そっちの娘（こ）もかしら？」

「アーシア・アルジェントって言います。私は教会を追放された身でして……」

「教会を、か……」

　そちらの騎士君も思い詰めた表情をしたし、実力は確かなのだが、何か訳アリの眷属が揃っているようだ。女王の姫島や、戦車の白音に関しては、それぞれ事情は分かっているがな。

「さっきから気になっていたのだけれど、アーシアさんも神器持ちなのね」

　アーシアには先程から、白龍皇の光翼自体に回復をかけてもらっている。そして、神器が直接触れたことによってか、その形は少し変化していた。

『ああ。聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）とよく似ているが、今回で確信した。天竜の姫巫女（シエル・ディヴァイン）だ』

『なるほど。ユーフェミアか。彼女が表に出てこれるほどの所有者は初めてなのではな

いか？』

二天龍の会話に、アーシアの神器である指輪に誰もが注目した。

『アルビオン様とドライグ様、なのですね』

「ユーフェミア、さん？」

ピンクの小さな宝石から、女性の声が聞こえた。

やはりドラゴン系神器か。

「メスのドラゴンらしいな」

「おい、なんか怯えてないか？」

『生前はよく喧嘩していたからな』

『その余波に巻き込んだこともあるかもしれん』

昔話を語り合う友のようだが、封印されるほどには、はた迷惑な存在だった。まあ、それもドラゴンらしい生き方なのだろう。

「邪龍でもなさそうだが、どうして封印されたんだ？」

『ドラゴンでありながら、回復系に秀でていましたので。その、争い事から逃げるべく、と言えばいいでしょうか』

『確かに。特に悪魔には狙われていたな』

『悪魔をも癒す力は貴重だからな』

いつの時代も、一筋縄ではいかないらしい。
「ユーフェミアさん。いまだ過酷溢れる世界ですが、共に生きていきましょう」
『ええ。ユフィと呼んでください、アーシア』
どうやら、２人も相棒になれたらしい。
ドラゴン系神器は相棒との会話が重要だからな。
「そんで、桐生のほうはなんなんだ？」
『おそらく、豊穣の西風神（デメテル・クリノミア）だろうな。癒しをもたらす風の神器だ』
「フッ、回復系神器のバーゲンセールだな」
『またヴァーリは・・・』
苦笑いされたところで、さて、そろそろ行くか。
アーシアのおかげで身体も神器も調子がいい。
「イッセー、そろそろ落とし前をつけにいこうか」
「……落とし前か。確かにそうだな」
この白龍皇が、借り物の力とはいえ膝をつかせられた。
いや、それよりも、イッセーは初めてのデートで騙され、一度殺され、トラウマを持った。さらには、幼馴染みの日常を守れなかった。それによる憤りを自分にぶつけてしまうくらいには、優しいやつだ。

やつらは、ドラゴンの逆鱗に触れたのだ。これはどこに所属しているか等は関係ない。我ら二天龍を甘く見た報いを受けてもらおうか。